

2014.11 / VOL.18
 ボーダレス・アートミュージアム
 NO-MA ニュースレター

2014年、これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「(社福)滋賀県社会福祉事業団」は、「(社福)オープンスペースれがーと」とひとつになり、「(社福)グロー」となりました。これからもよろしくお願ひします。

Jun 2014 **ボーダレス・アートミュージアムNO-MAは かげさまで開館10周年を迎えました**

展覧会レポート

快走老人録Ⅱ―老ヒテマスマス過激ニナル―

Topic of NO-MA

第11回滋賀県施設合同企画展

ing... ～障害のある人の進行形～

ABCcolumn

アール・フリユットを巡るコラム VOL.8

地域インタビュー

あの一ひの近江八幡スタイル
塚本 智映 さん アトリエひこうきぐも主宰/版画家

展覧会レポート

Exhibition Report

編：瀬戸さゆみ（本展担当）



「カカシ」小西節雄
本展は写真撮影ができるようになっています。
ぜひNO-MAで思い出を作ってください。

NO-MA開館10周年を記念して開催する本展は、「高齢」をテーマとしている。「老い」や「介護」は、より現実味を帯びて私たちの身近な言葉となつている。出展者は全員65歳以上の男性で、「老いる」ことをポジティブに、時にユーモアをもつて楽しみながら生きている方がばりだ。その生き方は、私たちに様々な発見や気づきを与えてくれる。

「快走老人」とタイトルにある通り、作家たちは展示準備中から「快走」ぶりを発揮していた。カカシを自宅の畑に作り続けている小西節雄は、人間そっくりのカカシを9体、



西之原清香さんの展示
NO-MA2階会場の様子

軽トラックの荷台に直立させて載せ、NO-MAへやってきた。箆袋やたばこの包装紙など何でも収集するコレクターの白井貞夫は、観覧者にプレゼントする箆袋を紙袋に詰め込みNO-MAを度々訪れる。展示室でまず目に飛び込んでくるのは、展示台の上に大量に置かれた福田増男の作品だ。一冊のぬりえを写しとることを20年以上も続けており、その量は膨大だ。白井の展示空間は、彼のコレクション部屋に在るような感覚に陥る。2階には西之原清香の空想と現実が入り混じった絵画や風が、異国情緒と懐かしさが同居する居心地の良い空間を作っている。既存の華道流派に属さず、独自の「生け花」を追求した中川幸夫の写真作品は、その一つひとつから花を見ると、燃えたる命の存在を突きつけられるようだ。



「五感マングラ」の様子

折元立身の作品の一つに、彼と母親が自室にいる場面を撮影した大きな写真作品がある。ある女性はあるの義理の母と似ていてオーラを感じる」と、作品としてではない別の視点からのまなざしを抱いている。館外に展示されている小西の手押し車を押すおばあさんのカカシに対し、「102歳まで健在だった私の祖母にそっくりで思わず連れて帰りたくなった」という言葉をアンケートに残してくださる方もいた。

本展の関連イベントとして、近江八幡にお住まいの方に昔の思い出を五感体験にもとづいて思い出してもらい、ひとつの絵地図をつくっていくワークショップ「五感マングラ」を複数回にわたり行っている。本ワークショップを通じて、近隣の方との交流の輪も少しずつ、しっかりと広がっている。



快走老人録II

一老ヒテマスマス過激ニナル

2014年8月9日(土)～11月24日(月・振休)

【出展者】折元立身、小西節雄、白井貞夫、
中川幸夫、西之原清香、福田増男

後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会
協力：ART MAMA FOUNDATION、社会福祉法人蒲生野会ホームさくら、
社会福祉法人富士福祉会ふじ美の里、中川幸夫事務所、
一般社団法人近江八幡観光物産協会、特定非営利活動法人しみんふくし滋賀

Topic of NO-MA

ing... ～障害のある人の進行形

「作品と作者が十分に紹介できる図録にしたい」「オープニングで身体パフォーマンスをしてはどうだろうか」「プレスリリースは分かりやすく、ポイントを絞ろう」

これは、第11回滋賀県施設合同企画展である。本展は県内の福祉施設職員とNO-MAが実行委員会を構成し、つくりあげる展覧会だ。今年は過去最多の30施設が参加し、28名の障害のある作者の作品をどのように見せていくか、話し合いを重ねている。

6月に行った実行委員会では、出展作品を持ち寄って全員で鑑賞した。集まった作品は、平面から立体まで多岐に渡り、絵画や陶芸の他に、手紙や織物が巻かれたリース、折り紙が貼り重ねられた作品など様々で

ある。じっくりと作品を見ていると、作品や作者への興味は尽きない。どんな人がどのようにつくりあげているのか、実行委員同士が快活に、時に悩みながら語り合う様子が印象的だ。

本展の特徴の1つに、実行委員が書いた作家紹介文が挙げられるだろう。作者一人ひとりの個性を見せる紹介文は、作品の魅力を一層引き立てている。ぜひ、こちらは展示会場で一読していただきたい。目の前の作品と作者の姿が重なる瞬間を味わってもらえるのではないと思う。

本展は、タイトルに「障害のある人の進行形」とあるように作者の表現の一瞬を見逃さず、日々進行し続けている彼・彼女らを見つめている実行委員によってつくられる。本展で

キャッチコピーに掲げている「心のままに。」という言葉が、観覧者にまっすぐ伝わるような展覧会にしたい。



片山みづほ(2014)

オープニングイベント

出展者の紹介や施設職員によるギャラリートークを行います。
日時：2014年11月29日(土)
13:30～15:00
定員：20名(要予約)

ギャラリートーク

『はじまりから広がる「ing...」』
「創作の始まり」について出展作品を担当した支援員がお話します。
定員：各回15名
時間：各回13:30～15:00



第11回滋賀県施設合同企画展
ing... ～障害のある人の進行形～
会期：2014年11月29日(土)
～2015年1月18日(日)
開館時間：11:00～17:00
休館日：月曜・年末年始

※祝祭日の場合は翌日休館
※年末年始は2014年12月29日(月)から
2015年1月5日(月)
観覧料：一般200円(150円)
高大生150円(100円)
※中学生以下・障害のある方と付添者1名無料
※()内は20名以上の団体料金

2014年12月6日(土)
さくら庵、能登川作業所、やまなみ工房
2014年12月20日(土)
工房和楽、杉山寮、わになろう、
びわこ学園医療福祉センター野洲
2015年1月10日(土)
湖北まこも、パンパン、ぼかぼか、みどり園

2015年1月17日(土)
社会就労センターあおぞら、信楽青年寮、
ステップアップ21、ひのたに園、ふくらの森
※出展者の制作の様子を見ることができ
公開制作も実施予定です。
※紹介施設は追加・変更場合があります。

会場は全てポーダレス・アート
ミュージアムNO-MA

出展作品を持ち寄って作品実見(写真左)



実行委員会の会議風景(写真右)

滋賀の生活美と溶け合う
アール・ブリュット



KBS京都ラジオ
「Glow～生きることが光になる～」
【ゲスト】上田 洋平
滋賀県立大学地域共生センター助教
【放送日時】
第40回 2014年7月4日(金)21:30～21:55
第41回 2014年7月11日(金)21:30～21:55

過去の放送はPodcastでお楽しみいただけます。
文：アサダワタル
「Glow」パーソナリティー

地域文化が専門の上田洋平さん。県内30余の集落に入り、その地をよく知るお年寄りの生活文化、伝統、風俗などを丁寧聞き取り、そこで語られた記憶を「ふるさと絵屏風」へと発展させ、内外に伝えていく活動をされてきた。事の発端は「自分の在り所を探した」と語る。在り所とは、本来自分の居所や村、あるいは郷里を指す言葉だが、上田さんはこの言葉を「からだ・こころ・たましいの根拠となる場所」と解釈する。ここで生まれ、この川の水を飲み、この野菜や米を食べ、大人になり、果すべき役割を果し、ここでいざれ死ぬのだが、死者にも居場所と役割があり、お盆には孫たちが墓まで迎えにきてくれる。この確固たる在り所の存在は、彼女たちがこの地で築きあげてきた技術や知恵の結晶とも言える。例えば漁師なら漁師、農民なら農民の生業を支えてきたワザとまなざし、日常の挨拶の所作、子どもが子どもとして担うべき役割など。上田さんの言葉を借りればそこに「いるすべ(居る術)」を、身近で切実な自然や人との関わりのおかげで一人ひとりが育み、磨き上げてきたのだ。一方で、都市化やグローバル化が進んだ現在の生活では、自身を育む自然や社会や歴史(時間)

とのつながりが、ひとつの地域に根ざすという状況は稀である。無縁社会とも言われる現在において、「先祖―私―子孫」という歴史的紐帯や土地と結びついた身体感覚はいよいよ希薄化する。上田さんは集落のお年寄りとの対話を重ねた結果、改めてこう語った。「この人たちの言う在り所は本物だ。けれどももう昔には戻れない。だからこそ現在の私たちが在り所をどうつくっていくべきなのか。これが私のテーマなんです。」

ところで、滋賀県は近年「美の滋賀」というプロジェクトに取り組んでいる。これは滋賀の生活に寄り添う神道・仏教の美(千年の美)、滋賀県の代表的な作家が生み出した近・現代美術(百年の美)、そして滋賀の先進的な福祉環境から生まれ、今注目を集めるアール・ブリュット(現在の美)。これら三つの美を融合させて発信していくというのが概要だ。例えば滋賀は国宝・重要文化財級の仏像数は全国4位。その多くが各集落の生活の中で自主的に手厚く管理されてきた経緯がある。筆者はこの「生活に埋め込まれた美」とも言える観点から、改めてアール・ブリュットに

展覧会場(美術館やギャラリー)はもとより、作り手の生活と創作の現場(作業所や特養や自宅)に訪ねる機会が以前よりも飛躍的に増えた。そこで得た感覚を誤解を恐れずに言えば、それは「作品を作っている感じというよりは、やるべき作業をしている」というものだった。もちろん作り手によってその印象を受け取る個人差はあるので一概には言えない。しかし、筆者も言葉や音楽を扱う一介の作り手として、「果たして自分はこんな風に淡々と作り続けられるだろうか」と嫉妬するくらいに、その姿は率直に格好良かったのだ。上田さんのラジオ収録中、このことを思い出しながらふとこう考えた。「現代の私たちが在り所を獲得するための確固たる方法。それは表現活動ではないか」と。アール・ブリュットの作家たちの多くは、障害特性というともすればその特性を全人格だと看做される可能性を孕む状況に対して、表現という名の「いるすべ」を存分に発揮し、自身が暮らす地域やより広い社会のなかで独自の在り所を獲得してきたと言えるのではないか。滋賀ならではの美の在り様にも注目しつつ、生活文化と芸術文化が渾然一体となった地平から、私たち一人ひとりが「オリジナルの在り所」を創作していくこと。アール・ブリュットには、この道程にまつわるヒントが、たくさん秘められているのかもしれない。

2012年、アトリエひこうきぐもと協働して行ったNO-MA企画展の関連ワークショップ



瞬間。子どもたちの目は星のようにピカピカと輝く。その光を見守ることを心がけてきたようだ。

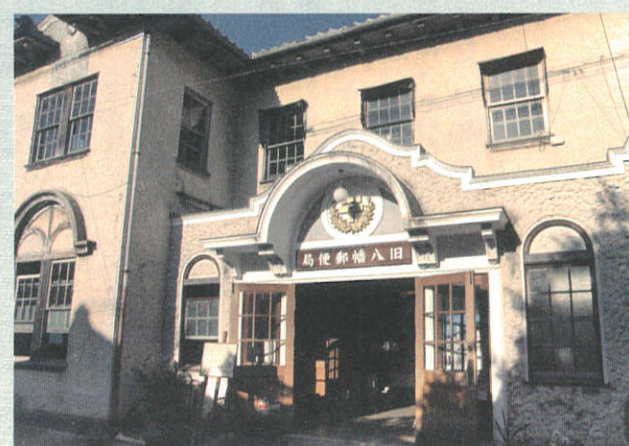
それぞれのペースで自由につくることを楽しんでいる。

アトリエをつくった塚本さんは近江八幡で生まれ育ち、美術短大在学中にヨーロッパで版画に出会った。自分の力ではどうしようもない「偶然性」によって完成する過程に惹かれ、その道を志すようになったという。結婚後も旧姓の三上智映として作家活動をしてきたある日、自分と同じ幼子を持つ友人から造形教室を開いてほしいと言われ、アートインストラクターの養成学校に通い始める。その時、友人に手をひかれていたのが冒頭の青年だ。旧八幡郵便局の保存再生運動にも関わり、昔から大好きだったこの空間でなければこんなに続かなかっただろうとアトリエを眺めながら振り返った。「元局長室という素敵な空間を10年間も借りることができて本当に感謝している」

塚本さんがアトリエのなかで楽しみにしていることがある。子どもたちが創作を始めて、ある程度時間が経ったところに「あ!そっか!!」が聞こえることだ。それは、自分のイメージを創りあげるため試行錯誤した結果に出会ったひらめきの

「おでかけアトリエ」ではNO-MAにスケッチに来て、そこで見た作品に創作意欲をかき立てられ巨大な作品をつくった子もいたという。

アトリエでは子どもと一緒に創作を楽しみ、学ぶことも多いという塚本さん。来年50歳という節目を迎え、「これからはアトリエ主宰と作家活動がイコールでもいいかな」と話す。子どもたちのなかにあるものを押しついたり引いたりしながら見守るアトリエ活動と、自分のなかにあるものを引き出す作家活動。相反する2つの活動がどのようにイコールに展開されていくのだろうか。「10周年だから、なにかしようか」と考えられている記念イベントは、新たな門出への祝祭にもなりそうだ。



アトリエを開催している旧八幡郵便局(近江八幡市仲屋町8)外観

地域インタビュー
ohmi-nachinan local interview

ヴォーリス建築のあたたかな空間で、子どもたちのひらめきを見守り10年一塚本智映と三上智映のつくること

アトリエひこうきぐも主宰
つかもと さとと
版画作家 塚本 智映氏

文：木元聖奈(アイサアドバイザー)



「今年で10周年だけど、なにかしないの?」。アトリエを巣立ってもよく遊びに来てくれる青年に言われて、積み重ねてきた年月に気付いたという。

仲屋町通りは旧市街地のなかでも一際賑わいを見せる通り。そこを往来する観光客が思わずぎづけになるのがヴォーリス建築の旧八幡郵便局だ。そこに「アトリエひこうきぐも」が開かれて今年で10年になる。月に数回、通りに面した元局長室で開かれており、幼稚園児から高校生までの子どもたちが、

あのひとの
近江八幡
スタイル

三上智映作「水の精霊」



NO-MAの新メディア

..... <書籍発行のご案内>



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 10年の軌跡
一境界から立ち上がる福祉とアート

発行:社会福祉法人グロー
企画:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA (社会福祉法人グロー)
監修:アサダワタル 価格:2,500円+税

2014年6月4日、NO-MAの10年をまとめた記録集を発売しました。関係者によって綴られる歴史とともに、カラー写真による展示会の記録を全216ページにわたって収録しています。NO-MA、Amazonにてお買い求めいただけます。

- 目次構成
- PART1 軌跡から/PART2 表現の力/
 - PART3 展示会の現場/PART4 世界へ/
 - PART5 地域で/PART6 福祉 アート 境界/
 - PART7 未来へ

..... <ラジオ番組のご案内>



アール・ブリュットをきっかけに人の営みを考えるトークラジオ。

Glow ~生きることが光になる~

放送日時:毎週金曜日 21:30-21:55
周波数:1143-1485kHz AM, KBS京都 Radio

2014年4月から、アール・ブリュットをきっかけに人の営みを考えるラジオ番組が始まりました。パーソナリティーは文筆家・音楽家のアサダワタルさん。そしてアール・ブリュットにまつわる現地からのレポートを社会福祉法人グローの田端一恵が担当します。放送エリア外にお住まいの方もぜひPodcastからお聴きください。

(音声は放送後の翌月曜日、祝日の場合は火曜日に更新します)



これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」は、2014年4月「社会福祉法人オープンスペースれがーと」とひとつになり、「社会福祉法人グロー」となりました。



ボーダレス・アートミュージアムNO-MA開館10周年特別企画展

「快走老人録Ⅱ -老ヒテマスマス過激ニナル-」 + 関連イベント

2014年8月9日(土)~11月24日(月・振休)

※月曜休館。ただし祝祭日の場合は翌日休館。

⌚ 11:00~17:00

Ⓜ 一般300円、高大生250円

中学生以下・障害のある方と付添者1名無料
「関西文化の日」11/15(土)・16(日)は観覧料無料

主催:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
社会福祉法人グロー (GLOW)
~生きることが光になる~

後援:滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協力:ART-MAMA FOUNDATION、
社会福祉法人蒲生野会ホームさくら、
社会福祉法人富士福祉会ふじ美の里、
中川幸夫事務所、
一般社団法人近江八幡観光物産協会、
特定非営利活動法人しみんふくし滋賀

映画上映会&対談「結い魂」

対談:長岡野亜(映画監督)

×白井貞夫(映画出演・本展出演者)

2014年11月9日(日)

⌚ 13:00~15:00(上映会)・15:00~16:00(対談)

📍 奥村邸(近江八幡市永原町上8) Ⓜ 無料

定員:40名(要予約)

多様な主体との共働によるアール・ブリュット魅力発信事業 関連展示会

本事業は、日本のアール・ブリュット作品の評価・発掘・展示の機会を創り、その芸術性を国内外に広く発信し、日本の芸術文化の発展と障害のある人の芸術活動推進を目的としています。新たにアール・ブリュット作品の全国公募を実施するとともに、昨年引き続き3つのアール・ブリュット展を開催します。

アール・ブリュット ゾーン パルコ ART BRUT ZONE PARCO

2014年11月22日(土)~12月25日(木)

⌚ 10:00~20:30 Ⓜ 無料 共催:大津パルコ

📍 大津パルコ(滋賀県大津市打出浜14-30)

KBS京都ラジオ「Glow ~生きることが光になる~
公開収録トークライブ

ゲスト:田口ランディ(作家)

嘉田由紀子

(びわこ成蹊スポーツ大学学長・前滋賀県知事)

聞き手:アサダワタル

(日常編集家・「Glow」パーソナリティー)

2014年12月14日(日) ⌚ 11:00~12:00

📍 カフェ スプーンライフワークス

(大津パルコ サテライト3階)

Ⓜ 無料 定員:30名(要予約)

出展作家・宮間英次郎さんの写真撮影会

館内を回る宮間さんと写真撮影ができます。

2014年12月20日(土) ⌚ 15:00~17:00

Ⓜ 無料 📍 大津パルコ(滋賀県大津市打出浜14-30)

ギャラリートーク ラジオオンエア

「PARCO Who's Who」@e-radio LAKESIDE FM77.0

2014年11月26日(水)・12月10日(水)

12月17日(水) ⌚ 各日とも16:27~

出演:井上多枝子(本展アートディレクター)

※上記展示会および関連イベントのお問い合わせ・ご予約はボーダレス・アートミュージアムNO-MA(下記)まで



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

滋賀県近江八幡市永原町上16

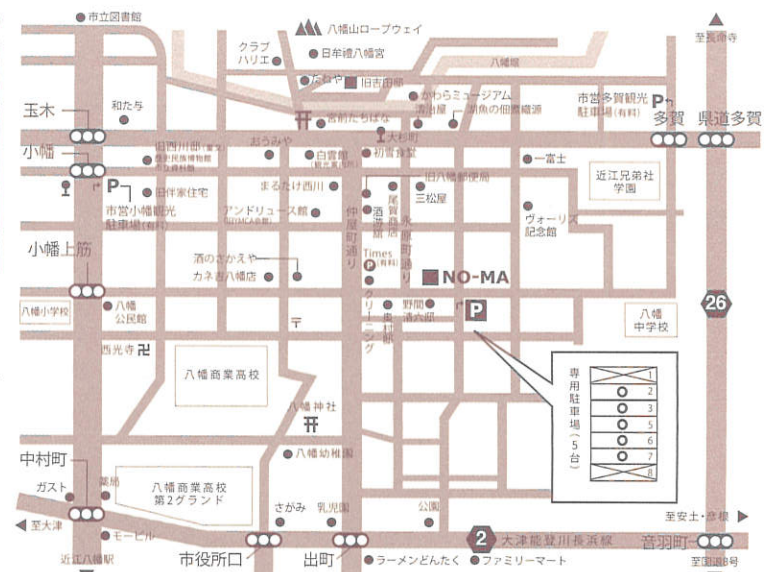
TEL/FAX 0748-36-5018

休館日:月曜日

(月曜日が祝祭日の場合は翌日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

http://www.no-ma.jp



バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町バス停下車 徒歩10分

車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ、国道8号「西横間」右折、「東川町」左折、国道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分)

【編集長はつぶやく】

私展「快走老人録Ⅱ-老ヒテマスマス過激ニナル-」を開催している。これは、私が2006年秋に開催した企画展の第二弾だ。その時から8年が経っている。そしてまた、私自身もついに年金を申請できる歳となった。若い頃は「老人」といえば「穏やかな余生を送る人」だと思っていたが、今では「老人になることで噴火する火山」のようなイメージを実感することができる。賑わう街中に出かけてみると、平日の昼間は老人が溢れているし、観光地も元氣な老人パワーが席捲している。

今回の「快走老人録Ⅱ」では、6人の出展者全員が男性となった。これは結果的にそうなったのだ。あらためて考えてみると、アートというものは人間の「遊び」なのである。アートが無くて人間は死にはしないにも関わらず、アートは延々と続いていく。

今展のカタログにも書いたが、男というものは「遊ぶ生き物」なのだと思う。それに対して女性は、生み育てることに幸福感を感じる様にできている。それが良いとか悪いということでは無く、そういう本能があるということなのだ。しかし近年、その傾向は明らかに変化している。女流作家などと特殊な呼び方はあまり使われなくなってきた。堀文字や秋野不矩などの時代は、きつと様々な苦勞を重ねながらも凛として貫き通し、自分の美の世界を創ってきたのだろう。当時を思うと胸が躍る。